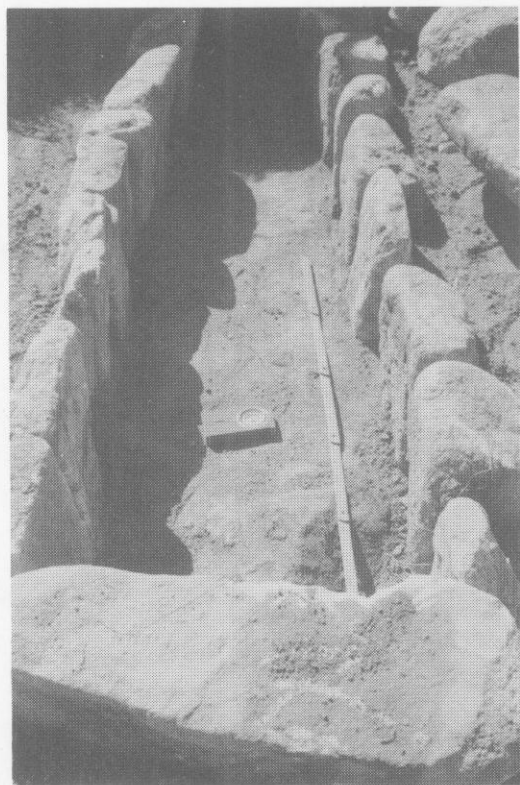


福岡県筑紫郡太宰府町

成屋形遺跡調査概要

1968年10月



福岡県教育委員会
エーザイ株式会社

序

最近の各種開発は、わが国の歴史の理解に欠くことのできない文化遺産を次々に破かいしていますが、まことに憂いよにたえません。やむなく破かいせざるを得ないものについては、是非記録保存の措置だけはこうじられなくてはなりません。

今回、エーザイ株式会社におかれては、太宰府町大字水城字成屋形において、配給センターを建設されるにあたり、敷地内に埋蔵文化財の包蔵されることを知られ、所定の手つづきをとられたうえ、自己負担で発掘調査を実施されましたことは、まことによろこばしい限りであります。深く敬意を表するものであります。

また、調査の実際は、福岡市東住吉中学校の三野章先生はじめ市内中学校の社会科歴史部会の諸先生が、炎暑の中を、クラブ活動の生徒諸君の教育をもかねて実施され、ここに早速報告書をまとめられたことについて、あわせてまた、衷心より御礼申し上げます。

なお、文化財の保護、顕彰については、さらに今後とも、各方面のご協力をお願い申し上げる次第であります。

昭和43年10月30日

福岡県教育委員会

教育長 吉久勝美

本文目次

1. はじめに	1
2. 遺跡付近の地形と立地	2
3. 遺構と発見の遺物	4
(1) 石蓋土壇	4
(2) 箱式石棺	5
(3) 古墳	6
a 第1号古墳	
b 第2号古墳	
(4) 竪穴住居跡	8
a 1号竪穴	
b 2号竪穴	
4. 遺跡についての考察	9

図版目次

図版1.	1	遺跡付近遠景（西側水田より）
	2	同 上（南側道路面より）
" 2.	1	石蓋土壇
	2	同 上（蓋石をあげて）
" 3.	1	箱式石棺
	2	同 上（蓋石をあげて）
" 4.	1	第1号古墳全景
	2	同 上 石室Ⅰー
" 5.	1	同 上 石室Ⅱー（斜上より）
	2	同 上 石室Ⅲー（北側壁）
" 6.	1	同 上 石室内出土鉄鏃
	2	同 上 墳丘周麓部出土須恵器片
	3	同 上 墳丘周麓部の浅溝
" 7.	1	第2号墳石材群
	2	同 上 石材間より出土の雲母片
" 8.	1	1号竪穴（北側より）
	2	同 上（上より）
" 9.	1	同 上 出土玉類
	2	同 上 出土黒耀石片
	3	同 上 出土弥生土器片
	4	同 上 出土土師器片
	5	同 上 出土須恵器片
" 10.	1	2号竪穴出土黒耀石片
	2	同 上 出土弥生土器片
	3	サヌカイト・スクレーパー

1. は じ め に

本遺跡については、昭和36年、水城より板付にいたる道路建設工事の際、すでに、その一部すなわち、道路に面した切り通しに、石蓋土壇らしきものが現われていたものようである。その後、本遺跡一帯が、エーザイ株式会社（本社・東京都文京区小石川四丁目・支店・福岡市大博町一番三号）の発送所建設用地として購入され、その建設工事の一部としての採土工事中、段丘頂部付近に石室が露出し、その内部より、鉄鍬三本が発見されるにおよび、大野町大字乙金106番地の高田一弘氏の連絡により、県教育委員会がこれをしり、直ちに現地調査を行ない、前記の石蓋土壇、石室その他遺構らしきもの数か処を確認したものである。

県教育委員会は、土地所有者エーザイ株式会社に対し、埋蔵文化財の発掘とどけをだしてもらうとともに遺構に関しての記録保存方を要請し、エーザイ株式会社は、この要請にもとづき、県教育委員会の紹介を得て、三野 章にその調査を委嘱し、ここに緊急調査を行なうことに決したものである。

調査期間は、昭和43年8月11日より同月28日までと、9月2日・同11日であり、この間、調査をすすめるにあたっては、同地工事請負業者戸田建設株式会社のみなみならぬ御協力におうところが少なくなかった。なお、調査にあたって、つねにより御助言御指導をいただいた福岡県教育委員会社会教育課文化財係長渡辺正気氏、ならびに、直接発掘調査に参加していただいた福岡市中学校社会科研究会歴史部会の先生方、一部実測を担当していただいた松井康治氏・肥山正秀氏、福岡市立三宅中学校・同高取中学校・同東住吉中学校・同高宮中学校・福岡教育大学付属福岡中学校の郷土史研究クラブの生徒諸君に深く謝意を表する。

●遺跡調査関係者

三野 章・添田 正治・平林 豊・磯部 香
下迫 勇夫・他福岡市中学校社会科研究会歴史部会員

●実 測・写 真

三野 章・添田 正治

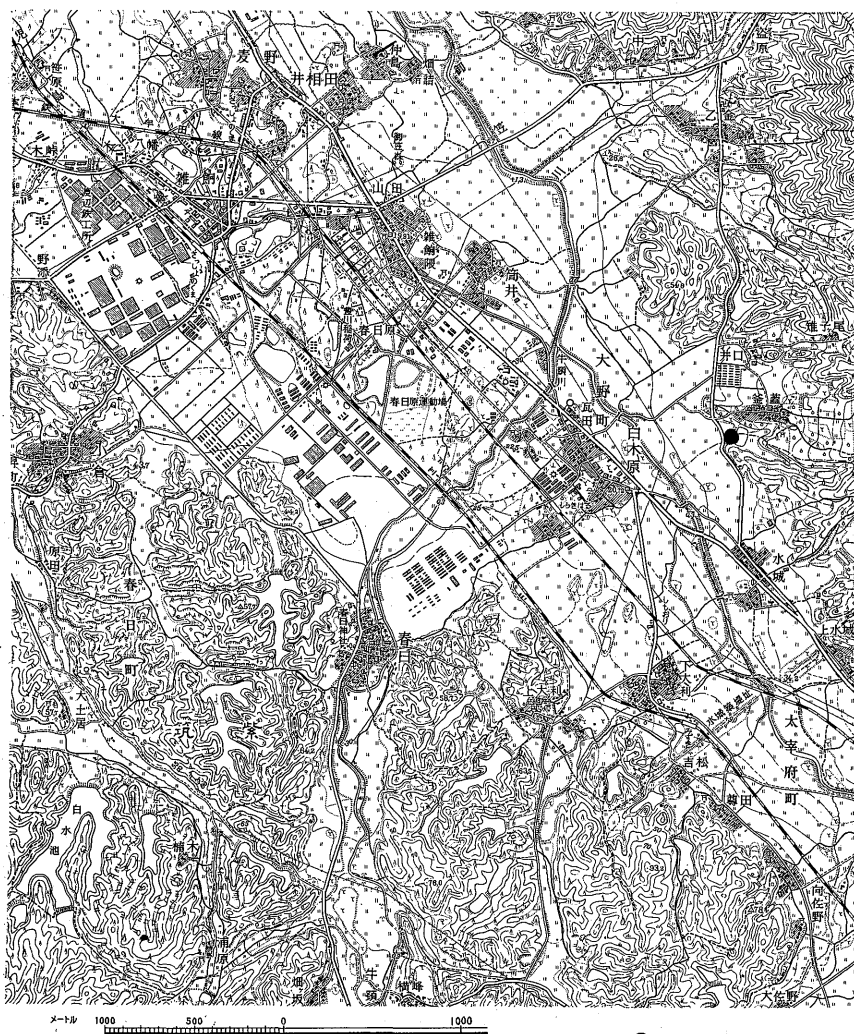
●執 筆 責 任

三野 章

2. 遺跡付近の地形と立地

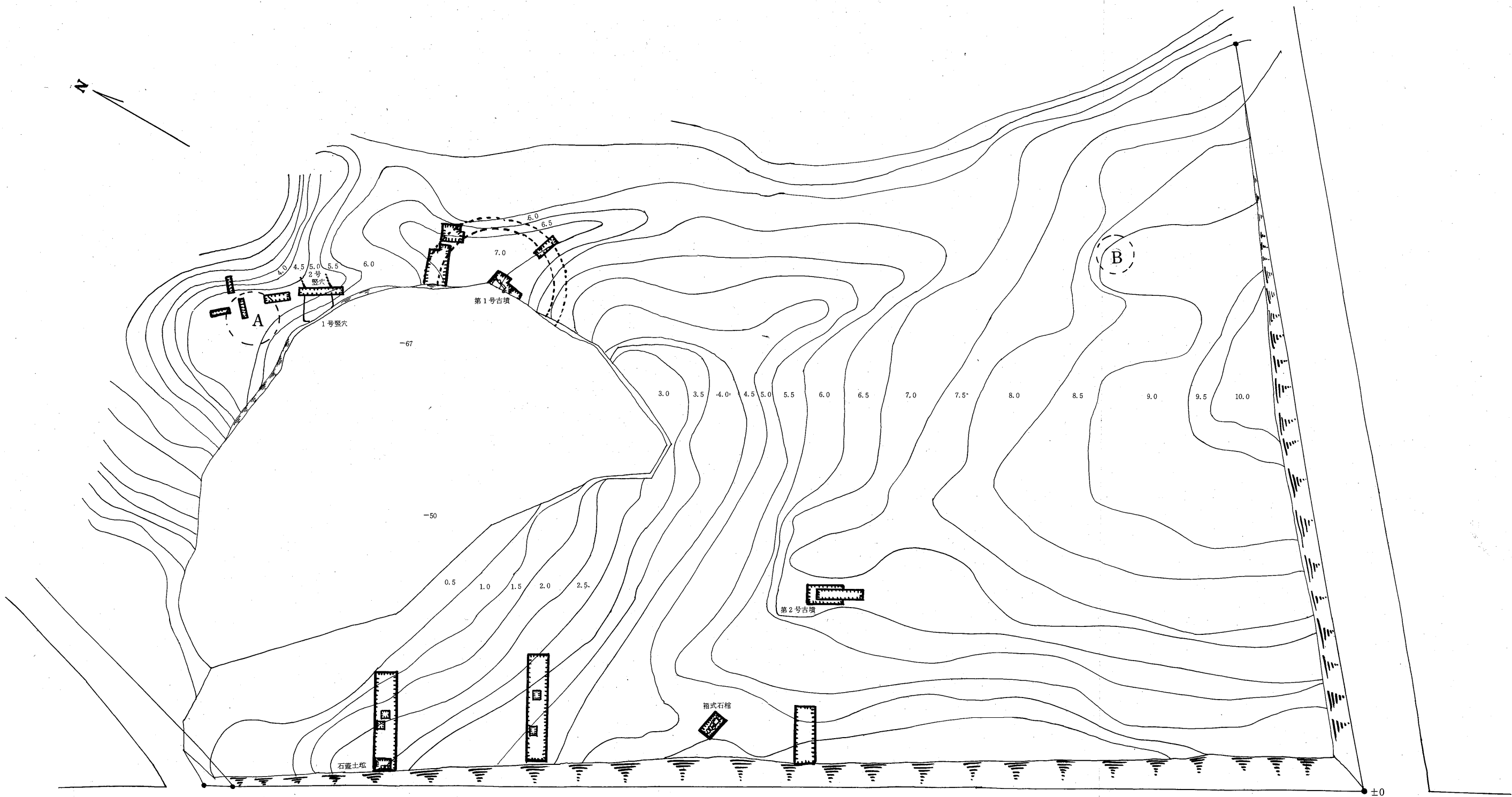
本遺跡は、宇美川と御笠川とにはさまれた四王寺山地山麓南西端に位置し、付近水田よりの比高12米前後の中位の浸食段丘一帯に分布している。この遺跡より北東方約0.5軒の釜蓋の丘陵一帯は、すでに遺跡として知られており、捺型文や阿高式の土器片ならびに、それにともなうと考えられる石鏃なども発見されている。また、御笠川をはさんでその対岸の春日町の段丘一帯は遺跡の密集地帯として、過去数多くの学術調査が行なわれ、報告書も発行されている著名な地域である。

なお、本遺跡の行政区劃は、福岡県筑紫郡太宰府町大字水城字成屋形、(第1図)段丘は、春日町付近の遺跡集団と同じように、そのほとんどが花崗岩の風化土壌よりなり、その一部には、火山灰の風化になるとみられる白粘土質の層位をもっており、現在は、雑木が一面に生育している。



第1図 遺跡付近地形 (1:25,000福岡南部)

この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。
(承認番号) 昭43 第8845号

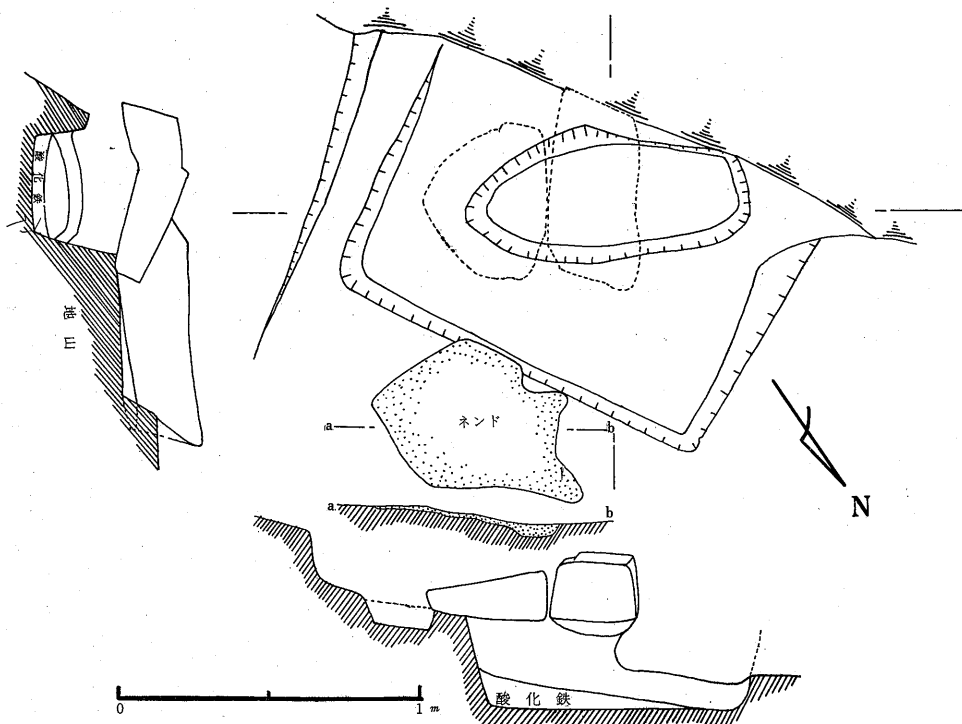


3. 遺構と発見の遺物

(1) 石蓋土坑（第3図・図版2）

前述のように、本遺跡西南、道路に面した切り通しに、花崗岩の蓋石の一部をすでに露呈していたものであり、地表面より蓋石上面まで49.5㎝、石蓋は、長軸95㎝、短軸45㎝のはほぼ楕円形の土坑上に二個残存し、北西端の蓋石一個ないし二個は、調査当時すでになく、おそらく、前記道路工事中に脱落紛失したものと判断される。なお、土坑と石蓋との接点部には、青色の粘土をつめており、本土坑墓のすぐ南横35㎝のところに、その残余とも考えられる同質粘土が、厚さ0.1㎝～4.0㎝、長軸約70㎝、短軸50㎝の不規則なひろがり地山面にはりついているのを確認した。

土坑は、主軸の方位 $W30^{\circ}N$ であり、30㎝の深さで地山面に堀りこまれており、その底部はほぼ水平であり、頭部と思われる付近で10㎝、それよりじょじょにうすくなる赤色顔料（酸化鉄）の層をもっていた。本土坑墓は、その規模より、小児墓と判断されるが、骨骼ならびに副葬品などはまったく発見されなかった。

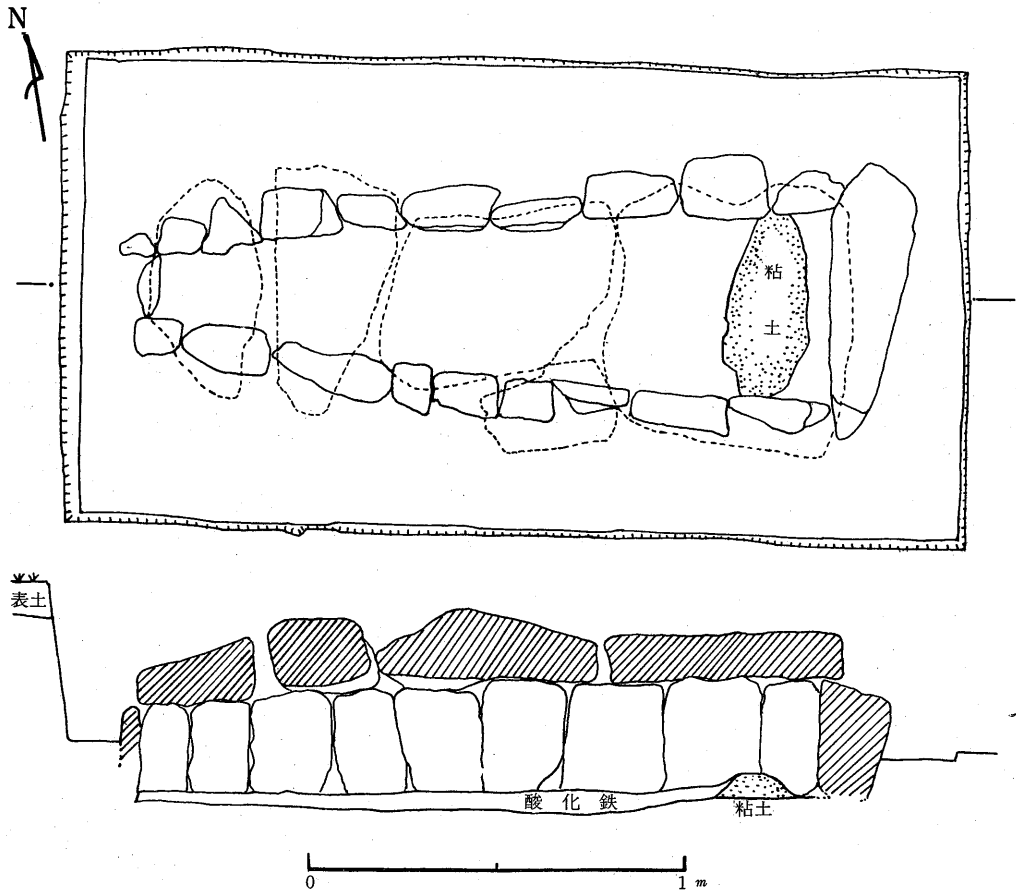


第3図 石蓋土坑実測図

(2) 箱式石棺（第4図 図版3）

本遺構は、前記の県教育委員会の現地調査の際、ボーリングによって石の存在がわかっていたので、発掘を行なったところ、地表より約20㎞の深さで箱式石棺の蓋石上面に達した。

頭部において主軸の方位は、 $E10^{\circ}S$ であり、蓋石は、比較的粗雑な花崗岩五枚で、棺身は、22㎞から7㎞程度の同質の板石を21枚組み合わせてつくっている。内法は、長さ1.77米、幅は一端が狭くなり、広い方で0.51米、狭い方は、それより0.34米減の0.17米であり、足の方の小口には、幅に合う一枚石を用いている。蓋石の一部は、ブルドーザーをかけた際、やや移動したもののようであり、実測は、その原形を想定し復元したものである。また、各石材の接着部には、石蓋土壇と同質の青色を呈する粘土をぬりこめた痕が確認され、かつ、棺内底部の頭にあたる箇所に、厚さ約5～7㎞の枕状の同質粘土塊を確認した。石材の内部に面する側は、蓋石も含めて全面に相当濃く赤色顔料（酸化鉄）が付着し、底部の削平された地山上にも、厚さ3㎞～5㎞の赤色顔料（酸化鉄）の層が認められた。棺内からの伴出の遺物はまったく発見できなかったが、石棺のすぐ横で、素焼土器片（弥生後期に属するもののようである。）三片を採集した。なお、この土器片にも赤色顔料の付着が認められた。



第4図 箱式石棺実測図

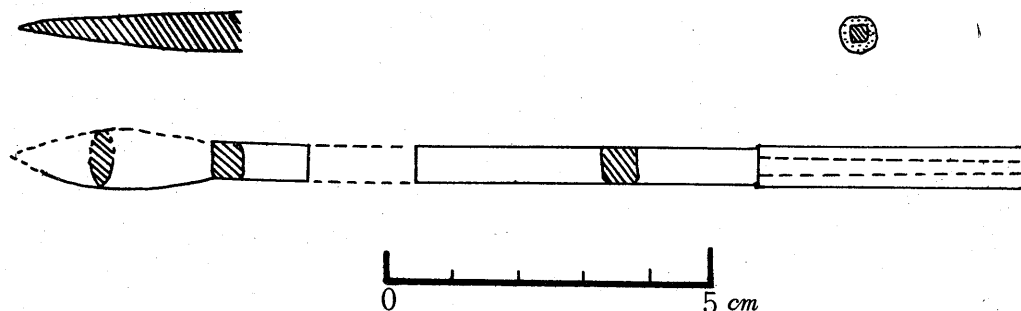
(3) 古 墳

a、第1号墳（第6図・図版4～6）

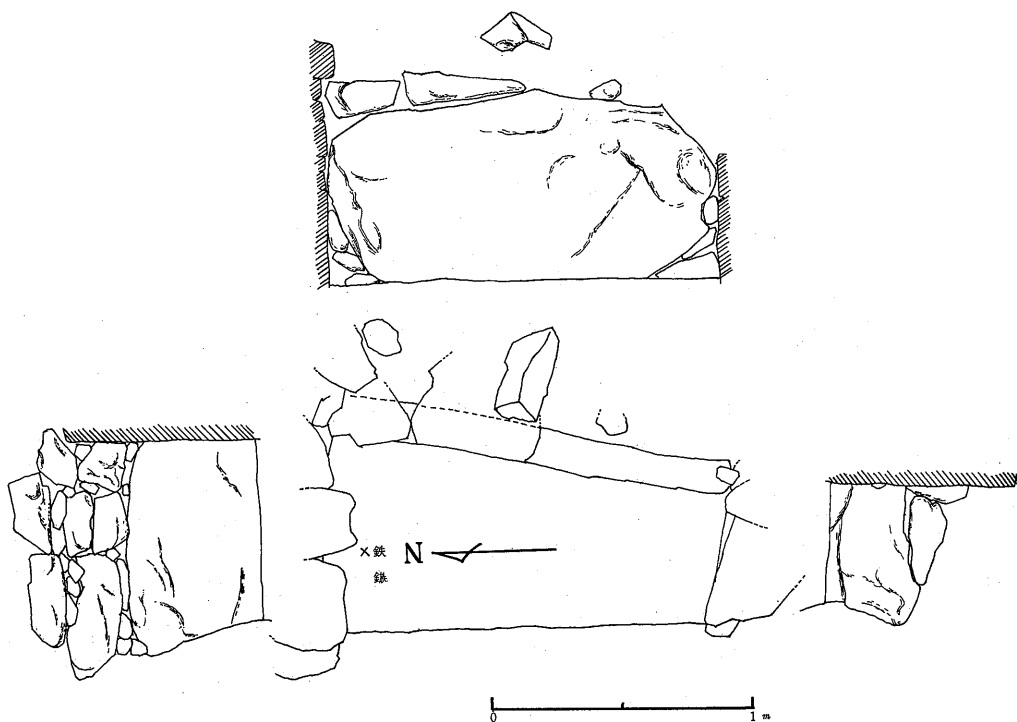
道路面よりの比高7米、この段丘では北側のほぼ最頂部に近いところに遺構はある。調査当時、すでに石室が露出していたもので、羨道部にあたると判断される墳丘の半分は、採土工事のため削りとられた状況にあり、墳頂部もすでに削平され、したがって、その墳丘の形状については、正確な規模を確認することはできなかった。本古墳は、単室の横穴式古墳と判断することができるが、石室は、奥石に幅1.5米、高さ0.7米の花崗岩の板石を用い、側壁は、下部に比較的大きい同質の板石を据え、その上部に中程度の石を組み合わせ、間隙に小石をつめる手法をとっており、天井石は紛失しているが、その状況より、床部より垂直の壁をもっていたものと判断される。なお、石室内には一面に赤色顔料（酸化鉄）を塗り、時期としては、5世紀末から6世紀初めごろのもので、横穴式の古墳としては比較的古いものであろう。

調査にあたって、周辺にいたれたトレンチにあらわれた状況から推定すると、本古墳は、直径約11.2米の墳丘を有していたもののようであり、石室の主軸は $W12^{\circ}N$ 、羨道部は WWN に開口し、東部は、自然の傾斜地形を利用して構築していたようである。墳丘のすそと考えられる部分には、幅1.4米、深さ最深部で約0.2米の浅いU字形の堀りこみをもっており、これをもって墳丘の輪廓を明らかにしていたものと考えられる。なお、この堀りこみの中には、多数のこぶし大の花崗岩の石塊ならびに須恵器片（図版6の2）がおちこんでいた。主体部は、前記のように石室の一部を残存するのみで、その内部の詳細をしるすべもなかった。

今回の調査において、付属出土品はまったく発見されなかったが、前述のように、高田一弘氏が鉄鏃三本を発見され、現在も氏が保管されている。氏の談話によると、この三本の鉄鏃は、組み合わせで立てられていたらしい。この鉄鏃（第5図・図版6の1）は、相当腐蝕がはげしく、実測の正確は期しがたいが、第5図の如く、比較的身の部分がながい細身のもので、すべて同一形式のようであり、鏃柄部には木質の付着が認められた。



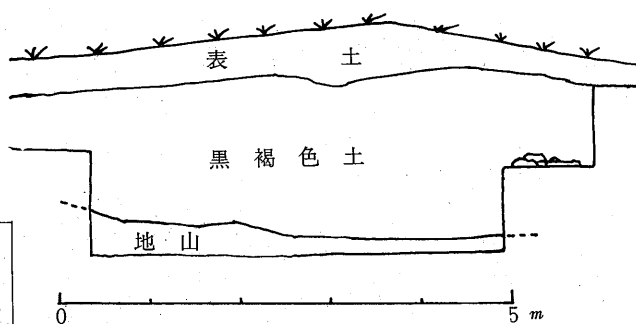
第5図 第1号古墳出土鉄鏃実測図



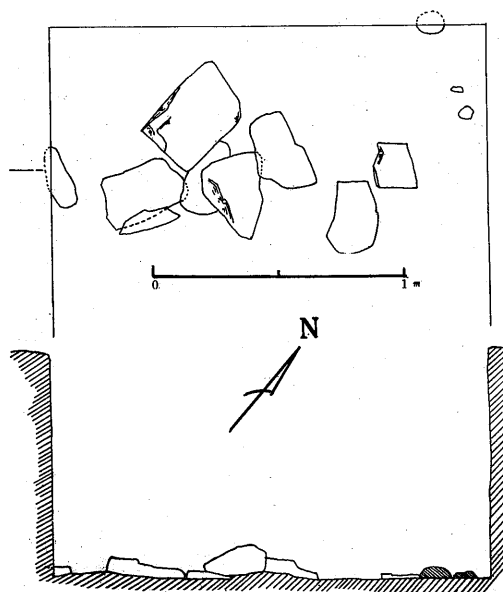
第6図 第1号古墳実測図

b、第2号墳（第7～8図・図版7）

道路側段丘にトレンチ四本を
いれた際、その南端のトレンチ
にかかって本遺構は発見された



第7図 第2号墳封土層位



第8図 第2号墳石材群実測図

ものである。しかし、本遺構は、すでに盗掘されたあとらしく、地表下約90㎝のところに、多数の赤色顔料（酸化鉄）付着の痕跡をとどめる石材を確認したにすぎない。ただし、その深さや、トレンチの断層に認められるもり土の層位(第7図)よりみて、墳丘を有するものの如く判断されるが、石材はすべて小さく結論はだしがたい。

なお、石材の間から、辺 2.0㎝程度の白

雲母片五片（図版7の2）が採集された。ただし、この雲母片が風化による自然的なものか、あるいは何等かの目的をもって他から運ばれたものか、その点判然とはしない。

※上記の二古墳以外にも、古墳らしきものが予想されていたが（第2図中のA）調査の結果、これは自然の小丘であることを確認した。他には、第2図B地域に古墳らしきもの一基、さらに、その地点より60米南東方向に直径約20米の円墳一基が確認されている。この後者の径20米の円墳の墳頂部は、すでに開口し、石材が露出し、盗堀の痕跡をとどめている。しかし、いずれもエーザイ株式会社の建設工事分野からはずれるので、今回の調査からははずした。

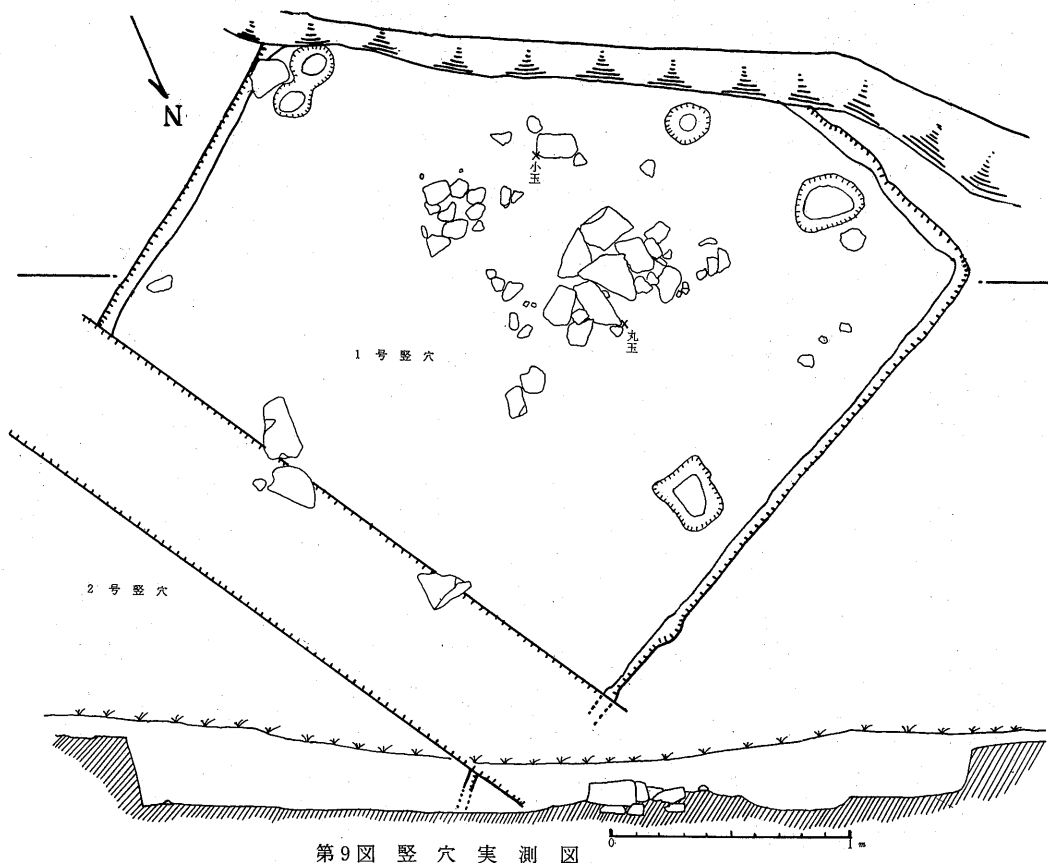
(4) 竪穴住居跡

a、1号竪穴（第9図・図版8・9）

古墳確認のため堀りこんだトレンチにかかって発見されたもので、前記石室の北西16米に位置し、トレンチによってその一部がきられているが、一辺約2.7米のほぼ正方形にちかい竪穴と判断される。竪穴は、地山面から22纏～28纏のほりこみをもち、周壁は、内部に平均約15°の傾斜をもっている。中央部地山面には、花崗岩質の石塊群が認められたが、それが何の目的によるものか判然としなない。ピットは、床面より深さ19纏のもの一個、他に深さ10纏前後のもの四個が確認されたが、その位置・形状から、柱穴であるか否かの判断はできなかった。床面には、一面に木質の炭化物が散布されており、かつ、弥生後期に属する土器の小片六個（図版9の3）また、ほりこみ内の土からは、土師・須恵の土器片数個（図版9の4・5）を採集した。なお、中央部石組付近においてガラス製の丸玉（図版9の1-a）一個、小玉（図版9の1-b）一個を採集、あげ土の中から同質の小玉（図版9の1-c）一個を採集した。ただし、後者の小玉は保管中にわれ、その半分を紛失した。その他としては、竪穴内のあげ土より黒耀石片二個（図版9の2）が発見されたが、この黒耀石片は、かぎくずとみられ、とくに加工の痕跡は認められない。

b、2号竪穴（第9図・図版10の1・2）

1号竪穴に接して、前記トレンチにかかり発見されたものである。1号とほぼ同程度の規模と推定され、地山面からの堀りこみ20纏～25纏のものようであるが、1号との境がトレンチ溝できられており、かつ、北東部は、かつて削られたものか、傾斜面にかかって、そのプランを確認することはできなかった。周壁も、まったく一号同様に斜めのほりこみで、おちこみの土の中からは、幾分加工の痕のあるものを含めて五片の黒耀石片（図版10の1）ならびに、弥生後期の土器小片（図版10の2）が採集された。もちろん、構造ならびに出土土器片・黒耀石片などより判断し、1号とほぼ同期のものと考えられるが、おそらく、両者は併立していたものではなく、相前後して構築されたものとみるのが至当であろう。



4. 遺跡についての考察

この成屋形遺跡は、石蓋土壇・箱式石棺・古墳、さらには、それにとまって二個の竖穴住居も確認されたわけであり、この地の立地条件などとも考え合わせ、弥生後期ごろから古墳時代にかけての、主として埋葬遺構を中心とした遺跡ということができよう。ただし、緊急的な調査であったため、全面にわたる詳細な調査を実施したものではなく、その点、遺跡としての規模については、明確な結論をだすことはできなかった。

今回の調査地区周辺から、サヌカイト製のスクレーパー二個（図版10の3）を採集したし、その他、多数の黒耀石片ならびに、数は少ないがサヌカイト片が分布していることなどから判断し、相当古いころよりの遺跡であったものようであり、できれば、今後、この段丘一帯についての調査が企画されることを願いたい。

なお、箱式石棺は、県教委の了解を得て、本調査終了後に石材を福岡市立三宅中学校（福岡市三宅銭通り）の校庭にうつし、実測図にしたがって復元し保存することに決定した。



1. 遺跡付近遠景（西側水田より）



2. 遺跡付近遠景（南側道路より）



1. 石 蓋 土 坑



2. 同 上



1. 箱式石棺



2. 箱式石棺



1. 第1号古墳全景



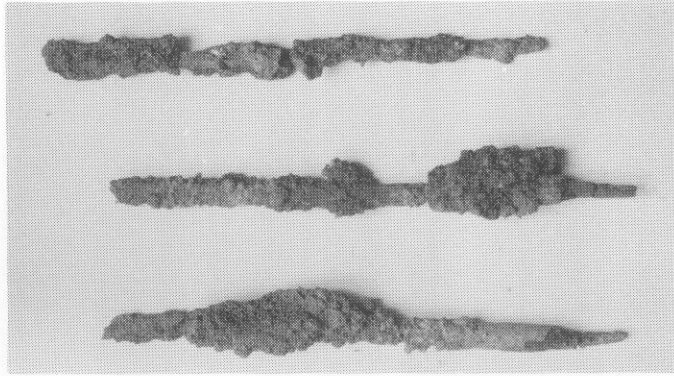
2. 第1号古墳石室-I



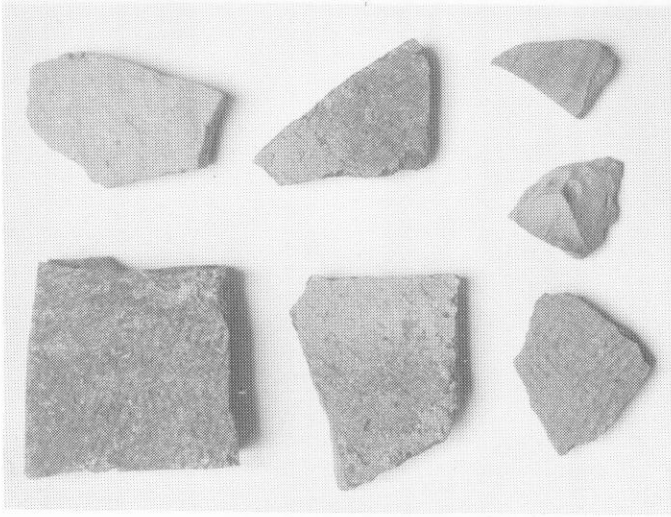
1. 第1号古墳石室-II



2. 第1号古墳石室-III (北側壁)



1. 第1号墳石室内出土鉄鏃（ $\frac{1}{2}$ ）



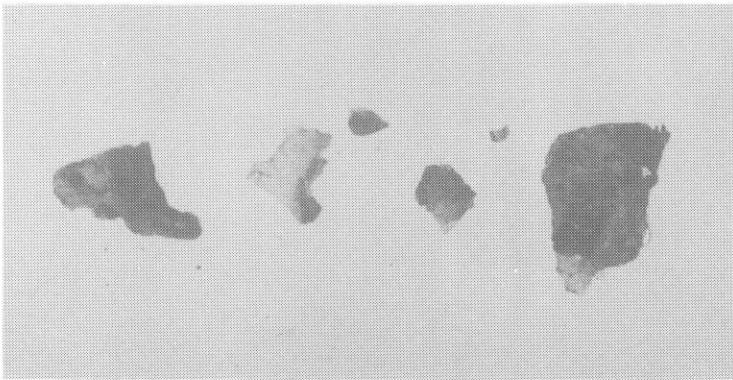
2. 第1号墳墳丘周麓部出土須恵器片（ $\frac{1}{2}$ ）



3. 第1号墳墳丘周麓部の浅溝



1. 第2号古墳石材群



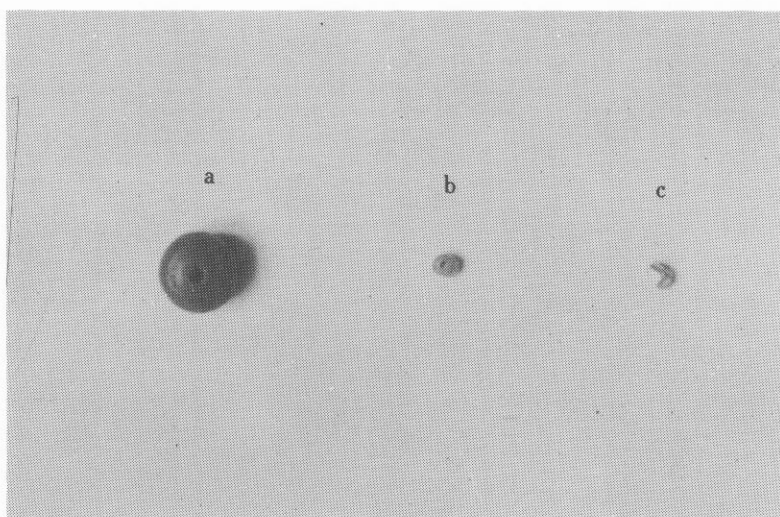
2. 第2号古墳石材間より出土の雲母片(実大)



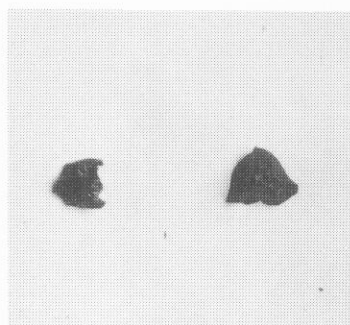
1. 1号竖穴（北側より）



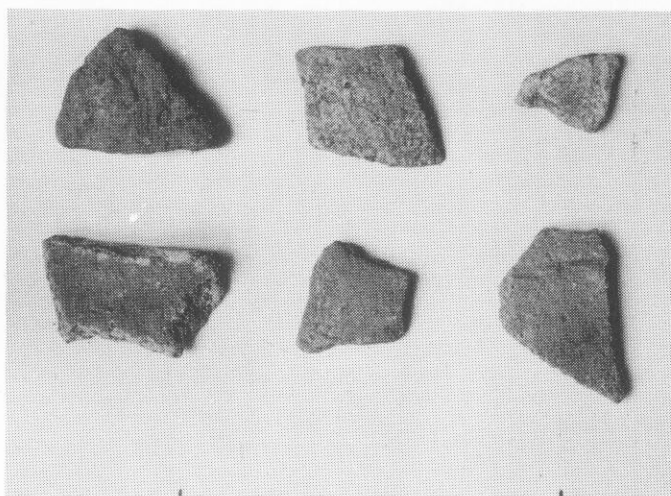
2. 1号竖穴



1. 1号竖穴内出土玉類（実大）



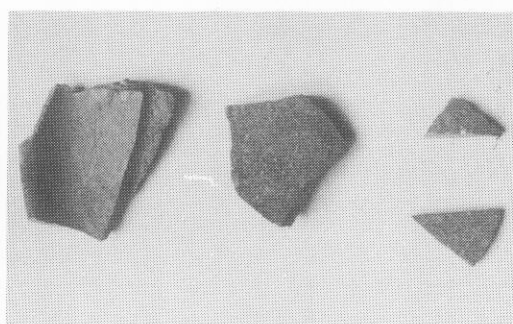
2. 1号竖穴内出土
黒耀石片（ $\frac{1}{2}$ ）



3. 1号竖穴内出土弥生土器片（ $\frac{1}{2}$ ）



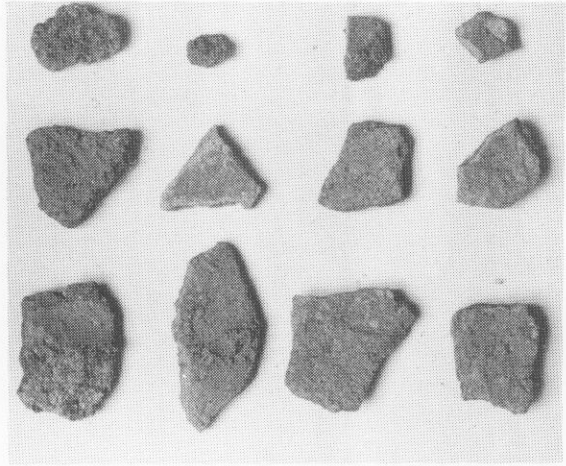
4. 1号竖穴内出土土師器片（ $\frac{1}{2}$ ）



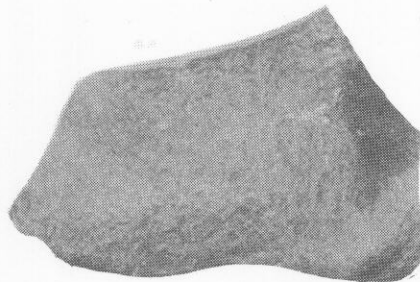
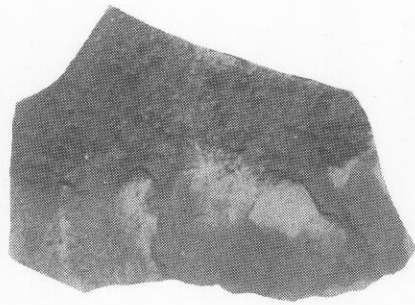
5. 1号竖穴内出土須恵器片（ $\frac{1}{2}$ ）



1. 2号竖穴内出土黒耀石片 (½)



2. 2号竖穴内出土弥生土器片 (½)



3. サヌカイト・スクレーパー (実大)

昭和43年10月31日

発行 福岡県教育委員会
エーザイ株式会社

印刷 株式会社 川島弘文社
電話 ㊦ 7616～7618番